

近頃、テレビが面白い

TVs are fun, recently



御子柴茂生
Shigeo Mikoshiba

...と言っても、番組が面白いわけではない。テレビ技術が面白いのである。1953年にテレビ本放送が始まった当時、電気屋の店先は力道山を見ようと黒山の人だかりであった。ラジオから白黒テレビへと、情報量が飛躍的に増大したときである。1964年東京オリンピックの時にはこれがカラーとなり、世界放映もされ、情報伝送量が再び飛躍的に増大した。当時、テレビがこれ以上に世の中の話題をさらうチャンスはもうないのではないかと、とも予想された。先日、ブラウン管発明100年記念行事に際し、RCAが1954年に開発したカラーテレビモデルCT100が展示された。初のNTSC仕様シャドウマスク方式カラーテレビである。見たときの感想は、“最近のテレビはこんなに美しくなった”ではなく、“50年前のテレビは既にこんなに完成度が高かった”であった。確かにカラーテレビの後は飛躍的改善がもはやないのではないかとこの印象を受けた。

しかし、地上デジタルテレビ放送が始まり、高画質化、放送内容の多様化、録画・再生の多機能化、伝送の双方向化など、再び情報量が飛躍的に増加した。携帯電話でテレビを受像する“ワンセグ”も可能となった。テレビが3度目の変貌(へんぼう)を遂げたのである。ただ一つだけ気になることがある。アナログテレビ放送は2011年7月に終了するが、昨日まで使っていたテレビが突然その朝から映らなくなってしまうことである。困惑する人が続出するだろう。社会問題とならないような対策を望む。

期を同じくしてテレビが極めて急速に進展している。まず大画面化である。コストダウンを目的としてマザーガラスの大型化が進み、もはやこのガラスを一人ではぶら下げても持つことすらできなくなってしまった。このためテレビの大画面化はスムーズに進行した。第七世代ガラスからは110型を1面取りすることができる。何年か前に42型テレビが発表されたときは“何と大きいテレビなんだろう、20型の小さく見えること！”と驚いたのも束の間、“40型テレビの何と小さく見えること！”となってしまった。投射型のように部屋を暗くする必要もないため、会社や学校の黒板がこのディスプレイに取って代わる。ホームシアターにもよい。アイマックスという巨大映像システムがあるが、これを見て感じることは、単に画面を大きくするだけでも

表示画像に立体感を覚えることである。この点からも、近いうちに高臨場感ディスプレイとしての新市場を開拓することになる。もっとも、玄関から搬入できないかもしれないから、そのときはついでに家も新築しよう。

高画質化に関するマイルストーンは、1080pのFull-Spec.HDである。この仕様のLCD及びPDPテレビが店頭にずらりと並ぶ日も近い。テレビ輝度信号は10ビットであるが、LCDではバックライト調光により、またPDPでは非バイナリーサブフィールド設定により、実効的に12ビット相当の画像をセット内で作り出すことができる。色再現範囲は、例えば6原色LEDバックライトの採用により、超NTSCが可能となった。ただし、テレビ信号に含まれない色も表現するため、印刷業界などの特殊用途が主体である。暗室コントラストは数千：1以上と申し分ない。LCDやPDPに動画を表示すると画像にボヤケが見られるが、特別なテストパターンを表示しない限り気にならないという意見も多い。表示画像ごとにガンマ特性を選択することにより、被写体を忠実に再現するのではなく、見栄えのする画像を創生することができる。この、いわゆる“絵造り”に関しては、セットメーカーがそれぞれの特徴を出した画像処理エンジンを開発している。

低価格化も驚異的スピードで進行している。毎日、ネットを見るのが恐ろしいほどである。インチ5,000円の時代に既に突入しているが、このスピードを加速しているのがLCDとPDPとの競合である。VGAとXGAの価格すら縮まってきた。

こうしてみると、大画面テレビの分野での最近の特徴は、種々のデバイスの住み分けが消滅しつつあることであろう。大画面、高画質、いずれの点でもLCDとPDPとの差は縮まっている。価格もびっくりするほど近い。さらに、これに有機ELとFEDが加わる。背面投射型も厚さ30cm程度になり、FPDの仲間入りした。これらのデバイスのねらいもやはり大画面、高画質テレビである。画面寸法や画質が変わらなければユーザーの購入の判断は価格である。デバイス技術の種類に関係なく、価格は必然的に最も安いレベルに統一されていく。大画面テレビの世界は複雑な様相を呈してきた。